R5（2023）年 共通テスト本試 問4用『散木奇歌集』

これは『散木奇歌集（さんぼくきかしゅう）』の一節で、作者は本文と同じく源俊頼です。

人々あまた八幡（やはた）の御神楽（みかぐら）に参りたりけるに、
人々がたくさん、　石清水八幡宮における御神楽に参上していたころに、

こと果てて又の日、別当（べったう）法印光清（くわうせい）が堂の池の釣殿（つりどの）に
御神楽の催しが終わった翌日、　長官光清の御堂の池の釣殿に

人々ゐなみて遊びけるに、
人々が　並んで座って楽器を演奏していたところ、

「光清、連歌作ることなむ得たることとおぼゆる。
「（私）光清は、（自分が）連歌を作ることを　習熟したと　思われる。

ただいま連歌付けばや」など申しゐたりけるに、
今すぐ　連歌を　詠み加えたい」　など申し上げ続けたので、

かたのごとくとて申したりける、
（源俊重は）「形式通りに」と思って（発句し）申し上げた句は、

釣殿の　下には魚（いを）や　すまざらむ　　俊重（ししげ）
釣殿の　下には　魚が住まないのだろうか　　源俊重

光清しきりに案じけれども、え付けでやみにし
光清はひっきりなしに　思案したけれども、　続きを詠むことができないで終わってしまった

ことなど、帰りて語りしかば、
ことなどを、　帰ってから（俊重が父の俊頼に）語ったところ、

試みにとて、
（俊頼は）「試しに」と言って（詠み加えた句は）、

うつばりの影　そこに見えつつ　　俊頼
（"釣"殿の）屋根の重みを支えるための"梁"、（つまり音だけ拾うと）
「つりばり（釣針）」の影が川底に（映って）見え続けていることよ　　源俊頼

東大合格 オンライン 敬天塾